



Title	詩的理想化と理想の制度化 -シラーの「ビュルガー詩批評」を二分法の詩論として読む
Author(s)	伊藤, 秀一
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1986, 27(1), p.71-84
Issue Date	1986-07
URL	http://hdl.handle.net/10069/15226
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T10:13:43Z

詩的理想化と理想の制度化 ——シラーの「ビュルガー詩批評」を 二分法の詩論として読む

伊 藤 秀 一

Idealisierung als Institutionalisierung Zu Schillers Bürger-Rezension als einer dichotomischen Dichtungstheorie

Shuichi Ito

„Leichte Kunst hat die autonome als Schatten begleitet. Sie ist das gesellschaftlich schlechte Gewissen der ernsten. Was diese auf Grund ihrer gesellschaftlichen Voraussetzungen an Wahrheit verfehlen mußte, gibt jener den Schein sachlichen Rechts. Die Spaltung selbst ist die Wahrheit.“¹⁾ (Th. W. Adorno und M. Horkheimer)

I 序 章

1791年の1月15日と17日にかけて「一般文学新聞」(Allgemeine Literatur-Zeitung)に匿名で発表された「ビュルガー詩批評」²⁾(Über Bürgers Gedichte)は、ドイツ文学史上酷評の典型として有名であり、その遠慮会釈ない論評は、当事者であるビュルガー(Gottfried August Bürger 1747-1794)を痛憤させたのみならず³⁾、多くの、おそらくこの批評の矛先が自分自身にも向けられていると感じた作家や詩人達の不興をも買った⁴⁾。同年の3月3日のケルナー(Christian Gottfried Körner 1756-1831)宛の手紙が暗示するように⁵⁾、これは一種の文壇スキャンダルとして理解されたようで、コープマンによれば、フンボルトやJ.グリムのような学者ですらその路線上でこの問題を取り扱っていたと言う⁶⁾。

しかし、忘れてならないのは、この批評が18世紀の芸術批評家（Kunstrichter）の伝統に則り、個人的な趣味問題へ還元され得ない美学的諸原則（ästhetische Grundsätze）をまず示し、後に具体的作品の細部にこれを当てはめて論評する、という形式を取っていることである。この評論を一瞥すれば、確かにシラーの意図がビュルガーの個々の詩を論じ、改善を教示することにあるのではなく、美学的諸原理の展開にあることが、論評中に占めるその量的比率からもわかる。

それでは何故シラーはビュルガーを論じなければならなかったのであろうか。シラーがビュルガーに始めて出会ったのは1789年のヴァイマルで、4月30日のシャルロッテ・フォン・レンゲフェルト（Charlotte von Lengefeld 1766-1826、シラーの婚約者）宛の手紙によれば、「外見においても社交においても何も極立ったところがない男だが、正直者で善人のようには見える。」⁷⁾と素気なく、別に私怨を持つ必然性はなかったようだ。つまり相手はビュルガーである必要はなかったのだ。攻撃されねばならなかったのは、ビュルガーの中に典型的に具体化された、とシラーが信じた文学の或る種の傾向であり、その文学を支持する受容者であった。そしてシラーをこの傾向に対立させて行く契機が何であったのか、を調べようとする時、この詩批評の成立年代のシラーの個人史内での位置が重要な鍵となる。

1791年1月はシラーにとってイェナ大学歴史学教授就任後の作品制作休止の時期⁸⁾であり、2月からの集中的なカント研究の直前である。伝統的文学史なら、青年シラーが疾風怒濤期を脱し古典主義的完成に向けて創造的苦悩の只中にいた、とでも記述するところであらう。現に苦悩の中にあつたことは否定できないかも知れない。窮乏と病気である。この年から死ぬまで病気（肺結核）から回復しなかったので、青年期の終焉という表現も或る意味では正しいのかも知れない。しかし重要なのは、作品制作休止の内実とそこへ至った経過、そしてそれがシラーの内部でどのような総括を見出したか、という問題の検証であらう。

本来シラーは詩人であり劇作家であった。しかし、マンハイム劇場の台本作家としてライバルのイフランド（August Wilhelm Iffland 1759-1814）に敗北し、1784年以降雑誌の原稿料がたよりのフリーランスライターになってしまう。その結果「見霊者」（Der Geisterseher）という読者受けするスリラーを連載小説として書き続けなければならなくなった。この経過は、シラーが社会における作家の位置や文学という営為の中での読者の存在についての或る種の意識形成を必要としたことを示唆するのに充分である。ケルナー宛の書簡でシラーは「見

「霊者」の市場経済的成效を喜びながらも、「笑いたければ笑えば良き。僕は脹らませて長く書くつもりだ。30ボーゲン以下には決してならないだろう。だって賢者愚者を問わない万人の称賛を無に帰してしまったら僕は大馬鹿者ということになってしまうだろう。ゲッシェンの原稿料も悪くない筈だし。」⁹⁾と自嘲的に売文業者を演じている。勿論シラーはそのまま売文業に転じたりはせず、「見霊者」はフラグメントのままで終わったのであったが。

この経過を通じてシラーが形成した意識は、1789年の教授就任演説⁹⁾で述べられたように、パン学者 (Brotgelehrter) と哲学的頭脳 (Philosophischer Kopf) とを区別し、後者に精神的営為の本質を認め、その領域の自律性を要求するものであった。これは次章で考察するが、芸術も学問的真理と同じ、或いはそれ以上の高みに置かれるべき精神的営為であるとされる。そのような見解に立つシラーが、「全ての民衆の想像力、感覚の能力と最も良く調和する真の大衆性 (Popularität) が存在する。」¹⁰⁾と信じ、平明な民衆の言葉で抒情詩を書くビュルガーに不満を持ち、と言うより恰好の攻撃対象を見出し、それを拠点として独自の文化史観を根底に据えた読者論及び文学理論を構築しようとしたのは極めて自然の成り行きだったのだ。

- 1) *Dialektik der Aufklärung*, Frankfurt a. M., 1969. (以下 DA と略記) S.121.
- 2) *Friedrich Schiller, Sämtliche Werke*, hrsg. von G. Fricke und H. G. Göpfert, München, 1980. (以下 SW と略記) Bd. 5, S. 970-985.
- 3) ビュルガーは1791年4月6日の「一般文学新聞」に「暫定的反批判」(Vorläufige Antikritik) を発表し、匿名の批評者に反論を試みているが、その同じページに、再び匿名で「上の反批判に対する批評者の抗弁」(Verteidigung des Rezensenten gegen obige Antikritik) が掲載され、完全に論破されてしまう。この時点においてもなお、シラーに私淑するビュルガーは詩批評の筆者が誰であるのかを知らず、「反批判」の中で自分と同種の詩人としてシラーの名前まで挙げている。後に真相を知ったビュルガーは大いに落胆したと伝えられる。
- 4) 「素朴文学と感傷文学について」(Über naive und sentimentalische Dichtung.) の註の中でシラーはそのことに触れているが、しかしその多くの詩人や作家達はビュルガーのような詩的才能さえも持ち合わせていないのでおかど違いだ、と嗤っている。Vgl. SW, Bd. 5, S. 758.
- 5) 「ヴァイマルではビュルガー批評がずいぶんと話題になってしまった。どこへ行ってもみんな僕にその批評を読んでくれるのだ。そしてゲーテが、自分がその著者なら良かった旨を公にすると、この批評を優れている、という声が強くなった。おもしろいのは、あんなに賢い人々がそろっていながら誰もその批評の著者を言い当てられないことだ。」

- Vgl. *Friedrich Schiller, Dichter über ihre Dichtungen*, hrsg. von B. Lecke, München, 1969 (以後 DüD と略記), Bd. I, S. 639.
- 6) Vgl. Koopmann, H.: *Der Dichter als Kunstrichter*, in: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*, 20, 1976, S. 229-246.
- 7) DüD, Bd. 1, S. 638.
- 8) 重要な詩作としては、*Die Künstler* と *Die Götter Griechenlands* の二つの哲学詩が挙げられるだろう。
- 9) DüD, Bd. 1, S. 678.
- 10) 「世界史とは何か、そして何の為にこれを学ぶのか」(Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte?) SW, Bd. 4, S. 749-767.
- 11) *Bürgers Werke*, hrsg. von L. Kaim und S. Streller, Weimar, 1956, S. 340.

II 詩の本質規定と民衆文学

シラーは「ビュルゲー詩批評」を一種のジャンル論から始め、近代——これをシラーは「哲学する時代」(das philosophierende Zeitalter)と呼ぶ——の確立とともに目的合理性の精神が台頭し、それによって演劇や物語芸術と比べて娯楽という社会的機能が劣る、つまり目的・手段関係 (Zweck-Mittel-Verhältnis) に最も順応できない抒情詩が零落する、と説く。そしてまさにそれ故に——ここにシラーの天才的弁証法が展開されるのだが——抒情詩の復権が要請されるのである。

「抒情詩が高次の精神的営為よりある一面で劣るとしても、他の面から見ればそれ故になおさら必要なものになってきたことが証明されるかも知れない。拡大した知の領域と職業の個別化によって我々の精神的諸力は必然的に孤立化、細分化されたが、この状況にあっておそらく唯一詩芸術のみが細分化された魂の諸力を再統合し、頭脳と心、英知と機知、理性と想像力を調和的に働かせること、つまり全人 (der ganze Mensch) を我々の中に再生させることができるのである。」¹⁾

啓蒙思想による目的合理性の考えが分業化を進め、それによって人間の自己喪失 (Identitätsverlust) が生じ、それを宥和するものとして自律芸術を規定する、という優れて近代的な洞察²⁾ は、シラーの初期の著作から一貫する、感覚と悟性の調和を成就する芸術、という図式の中にすでにその萌芽はあるものの、

芸術の非社会性を逆に社会的機能に転換し得たのは、哲学詩「芸術家」³⁾ (Die Künstler) の執筆を契機とする文化史的思弁によるものである。

「芸術家」は 481 行から成る長詩であり、人間の文化の三つの段階の目的論的展開をその内容としている。この三つの段階をそれぞれ刻印しているのは、知的倫理的真理と美の関係である。

美は人類の黎明期に於て、幼い悟性を感性的直観によって知らず知らずのうちに真理へと導びく優美の女神として象徴される⁴⁾。そしてその庇護のもとで芸術 (= 技芸 die Kunst) が生まれ出る。芸術は人倫の文化を準備し、その調和的發展を助ける。しかし第二の段階に於て学術と人倫は芸術の功績を認めず、その地位⁵⁾ を貶めようとする。だが最終的には芸術の美の中へ学術と人倫が調和的に融解し、女神は優美の帯 (Gürtel der Anmut) を脱ぎ捨て天上知の女神 (Venus Urania) としての姿を現す。

「ビュルガー詩批評」を貫いているのもこのような目的論的調和の核となるべき詩芸術の理念なのだが、具体的にはそこでどのようなことが詩芸術に要求されているのだろうか。シラーは「ビュルガー詩批評」の中で二つの公準を立てている。

第一に詩は、人間文化の調和的完成を助けることができるため、常に時代と共に進歩して行かなければならない。これは「哲学する時代」に凌駕されない質を持つ詩であり、これを作るのは自分自身が成熟した人倫を持ち、進取の精神で時代の精神的産物を取り入れる「教養人」(der gebildete Mann) 以外には考えられない、とされる。

「経験と理性が人類の為に積み重ねた宝は、詩的創造の手にかかって生と豊饒とを吹き込まれ、優美の衣をまとわなければならない。」⁶⁾

これがなされるためには理想化する技芸 (idealisierende Kunst) が必要となる。そしてこれがシラーが真の詩芸術に要求する第二の公準である。詩は現実や感情の中に生起するものをただ表出 (darstellen) すればよいものではなく、それを理想化 (idealisieren) しなければならない。具体的にはシラーは次のように理想化の作業を規定している。

「対象——形象でも感情でも行為でも、詩人の内にあるものでも外にあるものでも——の中の卓越したもの (das Vortreffliche) を、雑多で少なくと

も異質である夾雑物から解放し、様々な物の中に散在する理想美の光明を唯一の対象の中に集合させ、均一性を妨害する個々の画線を全体の調和の下に統合し、個別的局部的なもの (das Individuelle und Lokale) を普遍的なもの (das Allgemeine) へと高めること。』⁷⁾

そしてこの理想化技法 (Idealisierung) がビュルガーの詩には見られない、ということが批評の核をなしている。

シラーが説く真^{ポエジー}の文学とは、上記の考察からまとめると、

- (1) 時代の精神的状況に遅れを取らず、
- (2) 人倫的教養に富む詩人によって書かれ、
- (3) 時代を高尚化 (veredeln)⁸⁾ する規範となり、
- (4) 理想化された調和を表現する詩、

ということになるだろう。そしてこれがそっくりそのまま民衆文学 (Volkspoesie) の理念とも合致すべきだ、とシラーは主張するのである。

1) SW, Bd. 5, S. 971.

2) この観点を詳細に検証し、芸術自律性のアポリアを弁証法的に展開した労作としては Bürger, P.: *Zur Kritik der idealistischen Ästhetik*, Frankfurt a. M., 1983, を参照。

3) SW, Bd. 1, S. 173-187.

4) 原詩54行-63行を以下に試訳する。

「オリオンの星々の光輪に照らされ
 高貴な尊厳をたたえ
 清らかな精霊だけに見守られ
 紅い炎をあげて星々を越えて来るのは
 太陽の玉座に逃れ去った
 怖ろしくも壮麗なウラーニア
 今ここに炎の冠を脱ぎ
 美神としてわれらの前に立つ
 優美の帯をまとい
 自ら子供となって幼な児の言葉を話す」

優美の帯のメタファーについては「優美と威厳について」(Über Anmut und Würde) にその説明が見られるが、そこではこの詩中での意味とは異なって、必然の美に對置される自由の美の象徴である。この点に関しては Mettler, H.: *Entfremdung und Revolution*, Bern und München, 1977, S. 14-41 を参照。

5) 次章でも再び取り上げるが、真理と美、認識と直観、理性と感性の間の地位関係についてシラーは「芸術家」執筆中に悩んでいたようである。そのことはケルナーやシャル

ロッテ・フォン・レンゲフェルトへの手紙が示している。この問題故に詩自体の量も初稿（これは発見されていない）の三倍にも膨れ上がってしまった。その間シラーはヴィーラント（Christoph Martin Wieland 1733-1813）と何度かこの問題に関して議論をたたかわせ、考えを改め、詩に手を加えたところもある。その為、上記の地位関係の首尾一貫性が損われた部分もある。

6) SW, Bd. 5, S. 971.

なお「芸術家」で展開されたモチーフの残響がここで明白に看取されるが、それと同時にその矛盾も再び踏襲されて行くことについては、次章以降で考究する。

7) *ibid.* S. 979

なお「カリアス或いは美について」(Kallias oder über die Schönheit) では理想化は「純粹な形式に変容される」(in reine Form verwandelt) こと、と規定されている。
ibid. S. 431.

8) 高尚化 (Veredlung) と理想化 (Idealisierung) の同置をヴェルガーは「反批判」の中で、「それが同意語 (Synonyme) だろうか」と軽く批判しており、シラーは1802年に刊行された「小散文集」(Kleinere prosaische Schriften) にこの詩批評を収める時、Veredlungという言葉を削除している。またシラー自身も1795年にケルナーに宛てた手紙の中で両者の同義性を否定している。しかし、シラーに於て両者が深い関係にあり、その定義に曖昧さが残っていたことは疑いようがない。例えば「人間の美的教育についての書簡」(Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen, 以後ÄEと略記) の第26書簡には「低劣な現実を高尚化する理想的仮象」(SW, Bd. 5, S. 660) という記述がある。

Ⅲ 民衆詩概念と文化ダイコトミー

シラーは、民衆詩人を標榜するヴェルガーが自らの模範としてホメロスを引き合いに出しているのに対し、

「我々の時代は、そこで社会の成員のすべてが感情と意見に於て殆ど一致した段階を占め、それ故に簡単に同一の表現で自己認識し、同一の感情を共有することができたホメロスの時代ではもはやない。」¹⁾

と言って、エリートと大衆の間 (zwischen der Auswahl einer Nation und der Masse) には大きな懸隔があることを指摘し、文学受容の非均質性に対し、万人の為に書くべき民衆詩人はどう対処するのか、という問題提起をする。

前章で述べた真の詩芸術の条件からすれば、時代の精神的状況に遅れを取らず、エリートの人倫的教養を満足させる詩は高次の文化として大衆から離脱す

るのが運命のようだが、シラーの出した解答は異なっていた。

「我々の時代の民衆詩人は最も簡単なことと最も困難なことの二つの間にしか選択の余地がない。完全に大衆の理解力に甘んじ教養ある階層の賞讃を諦めるか、両者の間に横たわる巨大な懸隔を自らの芸術の偉大さで解消し、両者の目的を統一して追求するか、のどちらかである。」²⁾

この一見無理難題であると同時に正論にも見える主張には重大な仕掛けがあり、それが、おそらくシラーの意図に反してではあろうが、文化の二分化 (Kulturdichotomie) の制度的固定化を推進する理論的下地となって行くのである。と言うのは、シラーは自分自身とその修復困難性を認めている高次と低次の文化のダイコトミーのアポリアを作品内在美学的範疇の議論に還元することによって、文化ヒエラルキーの社会構造に起因する諸問題を切り捨て、その請ば自然法的制度化を可能にしているからである³⁾

シラーの美学には常に、美的自由 (ästhetische Freiheit) が自然の感性的諸衝動から人間を解放し徳性の調和的完成へと導びく、と言う図式が見られ、その理論は「人間の美的教育についての書簡」に於て最も完成した形を取るものであるが⁴⁾ その理論構成の下地となる美的間主観性としての普遍性 (Allgemeinheit) の、請ば超越論的措定が、上記の民衆詩人の規定において、受容論としては文化的階層分化の認容、制作論としては理想化技法による多様性の排除、という問題を生み出して行くことになる。

「時代の最も卓越した者達との暗黙の了解のもとで、彼 (民衆詩人……筆者) は民衆の心の最も柔軟で手を加えやすい側面を捉え、熟達した詩的感情によって人倫の衝動に援助を与え、凡庸な歌人が単調に、そしてしばしば害を与えながら満足させている情熱の欲求を情熱の浄化 (Reinigung der Leidenschaft) のために利用するだろう。」⁵⁾

この言説には啓蒙思想の影響が色濃く見られる。時代の最も卓越した者達と文化的アイデンティティーを共有する民衆詩人の社会的機能は、文化受容の統一性・均質性の崩壊に際し、美的普遍妥当性 (ästhetische Allgemeingültigkeit) を媒体としてその再構成を企図すべき文化仲介者として規定される。民衆詩人は高次の文化の代表者として低次の民衆のレヴェルを引き上げ、高次の芸術の

文化的独占をめざす。それによって一応文化の階層二分化の問題は解消されることになりそうだが、現実にはそれが不可能であることは自明であろう。しかしラーはこの無理難題をさらに押し進める。

「最も崇高な哲学ですらそのような詩人の手にかかれば自然の単純な感情へと解消するだろうし、最も労苦の多い研究の成果も想像力へ譲渡されるだろう。そして思想家の奥義は簡単に解説できる比喩言語で幼稚な分別にも推し当てられることになるだろう。」⁶⁾

ここでは「芸術家」の中で展開された認識の先駆としての芸術のモチーフが繰り返されている⁷⁾。勿論、芸術が理論悟性と道徳に奉仕するものでないことはラーもよく納得しており、その意識は、前章の注で述べたように、「芸術家」執筆中に形成されていったものである。しかし厳密な意味での自律性の概念が芸術の規定として見出されるのはカント研究の後であり、しかもそこでも、ここでは註説する余裕はないが、人倫と芸術の両領域の關係に錯綜が見られるのである⁸⁾。

何故ラーはそれほどまでに人倫に固執するのか、という問題は、第一に感性解放と慣習道徳の荒廃 (Freigeisterei)、第二に悟性法則の下に自然を征圧しようとする目的合理性の倨傲、という啓蒙思想のもたらした二つの潮流⁹⁾ そしてそれらが具現化したフランス革命という歴史的な手掛かりによって論究されなければならないだろう。しかし本論文はそこには入り込まない。ラーはこの二つの潮流——それはカントに「判断力批判」を書かせる契機となった自然と自由、理論悟性と実践理性の分離の問題でもあるのだが——を「二重の迷妄」(doppelte Verirrung) と呼び、そこから「美によって我々の時代を引き戻さなければならない。」¹⁰⁾ と説く。しかしこの責務を負わされた芸術は世界連関の中核という宗教が失った制度的地位を占めなければならないのである。そして、この機能的制度化とラーの主張する内在美学的普遍化要求が絡み合った地平で、次章で展開される困難な問題が生じてくるのである。

1) SW, Bd. 5, S. 973.

2) ibid.

3) *Zur Dichotomisierung von hoher und niederer Literatur*, hrsg. von C. Bürger, P. Bürger und J. Schulte-Sasse, Frankfurt a. M., 1982. の序論で、クリスタ・ピュルガ

一は芸術自律性と文化ダイコトミーの関係について次のように述べている(S. 21)。

「芸術の新しい機能規定により芸術は人間の日常経験から切り離されてしまう。このことによって、さらに、美的経験が少数の特権的階層に制限されてしまう、という結果が生じる。美的宥和は下層階級の排除という犠牲の上に成立する。この観点から自律芸術の排除原理が看取される。文学の二分化は、この連関では、近代化過程へのもうひとつの答えである大衆文学の駆逐を意味している。」

4) SW, Bd. 5, S. 642, ÄE, 23. Brief,

「美的な情調 (Ästhetische Gemütsstimmung) によって理性の自発性はもう感性の平野で動き始めており、感覚の力は自分の境界の内部で克服され、肉体的人間は高尚化 (veredeln) されて、もうその中から精神の人間が自由の法則に従って自己を展開して行くばかりなのです。」

5) SW, Bd. 5, S. 974.

6) *ibid.*

7) SW, Bd. 1, S. 174, *Die Künstler*, Z. 42-45.

「数千年が過ぎ去ってはじめて
成熟した理性が見出せたものは
美しく偉大なものの象徴の中で
すでに幼稚な悟性に開示されていた」

8) 例えば ÄE 第26書簡における美的仮象の二重性。

9) ÄE では前者を体現するものとして「未開人」(der Wilde)、後者については「野蛮人」(der Barbar) という表現が使われている。

10) SW, Bd. 5, S. 596, ÄE, 10. Brief.

IV 制度化としての普遍化としての理想化

18世紀の啓蒙主義の進行の中で宗教は、マックス・ウェーバーが脱魔術化 (Entzauberung) と呼ぶプロセスによって、世界の有意味的統一性の保証人たる制度的地位を失った。この地位を意味づけていた社会的要請はそれ自身二重性を持ち、それが宗教の社会的機能の二重性を規定してきたのだが、それは第一に、宗教は地上で実現され得ないものの天上に於ける実現、という契機を持つことによって、ユートピアの幻想であり、ひとつの宥和モデルを呈示し、第二に、宗教は天上で実現される人道的イデアが地上では実現されていない現実を自覚させることによって地上的不幸に対する批判ともなる、という二点である。この宥和と批判の二重性はそのまま、宗教の制度的地位を引き継ぐべき芸術の機能をも刻印している。

芸術が宗教に代わって占める領域の制度的機能とはそれ故、現実を支配する

目的・手段関係から離脱し、それに完全なる他者として対置され得る自律領域としてであり、その自律性を保証するのは概念的なものとの地位関係に於ける美的なものとの絶対超越性である。この地位関係に関するシラーの見解には前述のように不明瞭なものがあり、「ビュルガー詩批評」の時点では自律性概念についての明確な言及もないのであるが、上述した自律芸術の批判的契機に最も矛盾する要素は、特に理想化技法の概念規定に於て見出される。

本稿第二章で引用したように、シラーは理想化技法を「個別的で局部的なものを普遍的なものへと高める」ことと規定しており、そこでは単に個別のものから最高の普遍的なものに至る論理的ヒエラルキーが自明なものとして前提とされている。この考えの根底にあるのは啓蒙思想の体系思考である。アドルノとホルクハイマーは啓蒙の本質を、自然支配の意志を契機とし、容体の脱質化 (Entqualifizierung) と数量化 (Quantifizierung) による統一化・体系化 (Vereinheitlichung, Systematisierung) への運動として規定し、そこに多様性排除の思想を看取している。

「市民社会は等価物 (Äquivalent) によって支配されている。それは別種のものを抽象的数量に還元することによってお互いの比較を可能にしている。啓蒙思想にとって数字、特に一という数字に整除されないものは仮象となる。近代実証主義はそれを虚構 (Dichtung) の領域に追放した。統一性はパルメニデスからラッセルに至るまでの合言葉であり続け、多神教の神々と多様な質の破壊を主張してきた。」¹⁾

理想的普遍性と不完全な個別性という価値図式を詩 (Dichtung) に当てはめることによって、シラーは不完全な虚構という地位から詩を解放し、近代社会の体系の中での復権をもくろんでいる。しかしその復権によって詩の特異な地位が普遍性要求という啓蒙思想の論理的強制によって脅かされるのもまた必然なのである。

シラーは詩によって喚起される感情が、

「人類の普遍的性格まで高められ、普遍的な伝達可能性を持ち、すべての異質な夾雑物を取り除き、道徳法則と一致しながら、請ば高尚化された人類の膝元から流れ出ることによってのみ美しい自然の響きとなる。」²⁾

と説くが、そこで措定される普遍性要求は、第三章で詳説した文化の二分化 (Kulturdichotomie) の現実の前にひとつのアンチノミーとなる。しかもシラーが普遍性を付与された詩に要求するのは、道徳律に一致し、模範として人類を高尙化することである。これによって美的な領域に人倫的要素が混入し、詩の感性的側面が減少し知的な側面が前景化する³⁾。すると低次の文化受容者はそこに固有の文化的アイデンティティーを見出すことができず、文化のダイコトミーはさらに深化する。さらに、このように概念的要素が混入したシラーの普遍性要求は、統一化・体系化意志の中で排除されようとする多様なもの、固有のもの、整除され得ぬものを自律性の領土の中で仮象として現出させ、道具的理性 (Instrumentelle Vernunft) の暴力に反省を促す、という詩芸術本来の批判的役割を不可能にしてしまう。

さらに文化ダイコトミーの問題をイデオロギー批判の見地から検討してみよう。シラーの説く真正の詩が唯一普遍性を持ち得るとするなら、その普遍性に合致しない芸術は非芸術として美的領域から追放され、その非芸術を受容する者は文化的アウトサイダーとなる。この論理を少し乱暴に解釈すると、普遍性を持ち万人に開示されている芸術を理解せず、その共有を拒む者がいるなら、それは愚か者の異端者であり、文化の構成者とは認められない、ということになるだろう。これはイデオロギー的に危険な要素を持っている。何故なら、自由に文化を選択できる大衆が、万人に開示され普遍的真理を内包する芸術を拒み、自発的に低級な芸術を選ぶ、とするならば、その罪は大衆に帰され、美的趣味の低劣さが自然発生的なものと説明されて王権神授説的な文化的貴族主義が台頭してしまうからである⁴⁾。そしてその意識がゲーテ時代のヴァイマルに於て支配的であったことを疑う者は誰もいないであろう。

1) DA, S. 11.

2) SW, Bd. 5, S. 986.

3) 第二章で註説した「時代の精神的状況に遅れを取らない詩」の概念を参照。

4) ヨッヘン・シュルテ・ザッセは *Zur Dichotomisierung* (Ⅲの註3)を参照) 中の論文 *Gebrauchswerte der Literatur* で、70年代初頭から盛んになった通俗文学研究 (Trivial-literaturforschung) のイデオロギー批判的契機を次のように記述している。

「これらの分析の攻撃点になったのは二分法的 (dichotomisch) な思考規範であった。この思考規範のイデオロギー的政治的目標は、文化産業が押しつけてきた行動様式の責任を大衆に転嫁する、つまり大衆を無制限に自由な個人と規定し、それが自分の責任で『がらくた』に殺到する、と説明する点にあるようだ。」

V 古典性と制度 —— 結びに代えて

以上の考察を踏まえてヴァイマル古典主義に目を向けると、現実の矛盾を捨象し、諧調を旨とする高い様式性が前述の多様性排除の理想化要求を理論的下地としていることと、「文学者のために文学者によって書かれる」¹⁾ 閉鎖的受容状況が、文化的階層二分化への根本的批判を欠いたドグマティックな美的陶冶論の矛盾が現出したものであることは容易に看取される。

自律性の領域であり、その直観性によって万人に開示され、絶対的他者 (das absolut Andere) として現実の不自由性に対置される芸術の制度的地位はそのまま主張しつつ、その中身を理想化要求と人倫的要素の混入によって理性を主体とする統一化の意志の下に規定し、社会的 (論理的) ヒエラルキーと呼応する普遍性を制度的に定立するシラーの言説は、我々の芸術観を古典性として今なお支配し続けている。それは例えば、高級なクラシック音楽と低俗なポピュラー音楽というひとつの自明性としての社会的了解の中に顕れている。

そして、さらに問題を複雑にするのは、低次の芸術として了解されている美的領域を支配している文化産業 (Kulturindustrie) の存在であろう。道具的理性 (instrumentelle Vernunft) を主体とし、大衆性を永遠に再生産して行く文化産業は²⁾、低次の芸術を目的合理性の軛の下に支配する。つまり、本来恣意的に形成された「大衆性」という幻想が感性的手段である大衆文化の欺瞞によってあたかも自然の所与であるかのごとく固定化され、制度化されることによって、支配・被支配の構図が隠匿されてしまうのである³⁾。

この領域がこのように現実の不自由性の影を引きずっていることを見抜ける者は、仮象の自由の領域としての高次の芸術を求めるが、その自由が前述の古典性によって刻印されている以上やはり不自由性からは逃れ得ない。この閉塞性からの自己解放を求めたのがドイツでは初期ロマン主義者達であり、さらに時代を下ってはアヴァンギャルド諸運動⁴⁾ である。このことについては勿論稿を改めて考究して行かなければならないだろうが、その際、脱差異化の美学と批判理論の両者が総合的に考察の土台をなすことが最も適切な方法になるであろう。

1) Prutz, R.: *Über die Unterhaltungsliteratur, insbesondere der Deutschen*, in ders.: *Schriften zur Literatur und Politik*, Tübingen, 1973, S. 22.

2) 「文化産業」という用語は DA で始めて用いられた。それは、「大衆文化」という用語

が可能とする「大衆の間から自発的に形成される文化」という解釈を排除するためであった。

- 3) Vgl. Adorno, Th. W.: *Résumé über Kulturindustrie*, in ders.: *Ohne Leitbild*, Frankfurt a. M., 1967, S. 61.

「文化産業は所与的で永遠不変なものとして仮定された大衆の気質 (Mentalität) を倍加し、固定化し、強化するために大衆への顧慮を濫用する。」

- 4) この問題についての労作としては Bürger, P.: *Theorie der Avantgarde*, Frankfurt a. M., 1974.

(昭和61年 3月17日受理)